

2017/4/12

(日々雑感 75)



雨が強めに降っていたせいと、四月にしては冬に逆戻りしたような時ならぬ寒さのせいで、お客さんは僕だけでした。

例の中華料理店での話です。

その日朝から多忙で、諸処を歩き回り、最後は大学院大学の先生と長時間にわたってかなり根を詰めた話をしたせいで「いささか」疲れており、息抜きのために、前回の訪問からあまり日をおかずに行った訳です。

どのお店でもそうですが、僕はお店の人と話をするのが楽しみなので、いつも大抵は開店間際でお客さんが少ない時を見計らって行きます。

その日も、雨で寒くてお客さんはすくないだろうとは言え、やはり早めに訪れました。

訪れてからまもなく、ポニーテールの若い女性が服について雨滴を払いながらお店に入ってきました。入ってくるなり、俊例となにやら話をしているので、中国出身の人だと分かりました。

大きなトートバックを丸いすにドンと置いて、カウンター席の隣の隣に座り、こちらに背を向けてまだ、俊麗となにやら僕には分からぬ早口の中国語で喋っていました。僕は意味がまったくわからないので、ほったらかしておきました。

すると、その子がやおらこちらを向いて

「少し話してもいいですか？」

と、あまり上手い発音とは言えませんが、それでも俊麗に比べたらかなり上等な日本語で問いかけられたので

「いいですよ。学生さん？ひょっとして駅向こうの音大の」

「はい。そうです。」

「何の楽器の？」

「ピアノです。あと、あと、その作曲も勉強したい、思ってます」

恐らく俊麗が「このひと、中国人や中国の人に興味ある人だから、よかったらはなしかけて

みたら？」とでも言ったのかもしれませんが。見てくれ上は若い女性が声をかけたくなるような風体、風貌の持ち主ではないからです。

「ところで、音楽家、誰知ってますか？」

と訊くので

「バッハ、ヘンデル、モーツァルト、ショパン、チャイコフスキー、ムソルグスキー、ワーグナー、ベートーベンとか？」

「すごい！びっくりしました。中国では、ベートーベン以外知りません。音楽やっている人以外は。わたし、ポピュラーとか、歌謡曲、中国の曲、あまり好きではないです。クラシックが好きです。それで、ピアノしてます」

「じゃあ、ラフマニノフとかリストとか？」

「そ、そ、そです。すごい。知ってるですか？」

「リストって手がでかかったんだよね、確か」

「そ、そ、手大きすぎて、作った曲、女のわたしの手では、なかなか弾けません。指、とどかない鍵盤に」

そこへ俊麗がその子が注文した品物を持ってきてカウンターテーブルの上に置きました。みると、お茶碗にご飯がてんこ盛り状態です。

「すごいね。そのご飯」

というと

「恥ずかしいです。でも、アルバイト毎日、毎日で疲れるから、たくさん食べてしまいます」

「良いんじゃないの。ドンドン食べなよ。やせてご飯残す子、僕あまり好きじゃないから、良いと思うよ」

「はい、食べます」

と、その子は大きな口を空けてご飯をばくりと一口食べました。

そのあと、その子はご飯をばくつきながら、僕は紹興酒を呑みながら話を聞いたところによると

中国は哈爾濱（ハルピン）の出身で、お父さんは広告関係の仕事、お母さんは音楽の教師をしている。その影響で小さい頃からピアノを弾いていた。中国では良い学校がないので、日本に留学に来た。あまりお金がないので安い今の学校を選んだ。国立はもっと安いけれど、入学が難しいので受けなかった。哈爾濱はロシアの影響の強い街なので、チャイコフスキーとかムソルグスキーとかロシアの作曲家の名前を知っていたので驚いた等等

「こういう作曲家の名前は、日本では小学校、中学校で全員教わるんだよ。でも、卒業すると忘れちゃう人が多いのかもしれない。僕はたまたま覚えていただけだよ」

「へえ～、そうなんですか。信じられない。中国では、小さい頃に道が決めれて、その道のことしか教えてくれないし、覚えようとする人もいない。その道は詳しいけれど、他のことは何も知らないあるよ。だから、ピアノ以外、作曲勉強するの大変。論文やレポート書く日本語も大変。わたしの日本語おかしくないですか？」

「別に。よく分かるよ」

「そ、ですか。嬉しいです。日本語覚えるの大変。レポート書くの大変。ピアノ大変。作曲の勉強、もっと大変。アルバイトもある。寝る時間、毎日4時間しか無い。眠いよ」

「そっか。小さい頃から道を決められて、そればかりやらされるのは可哀想だな。幅も狭くなるし。そうやって育つと、他のこと途中でしたくなかったとき、苦勞するからなあ」

「苦勞してます、今、大変の大変」

「でも、大変だろうけど、やっておいた方がよいよ。山、三角形だろ？底辺が狭いと、高い山、立たんやろ？底辺が広いから高い山は立つよな。底辺が低いのに高い山立てたら、ひっくり返りやすいしな。大変でもいろいろやって拵げることが勧めよ。学校での勉強だけじゃなくて、この店にいるときだって、なんか見つかるかもしれんやろ？今の大変は、いいことかもしれんよ」

その子は、しばし「ほお〜」と言う顔つきになってから、少し間を置いて

「良い考え。とても良い考え！とても分かりやすい喩え。隣に座っただけで、びっくりする話聞いた。ありがとです。わたし、これから出かけます」

「どこに？」

「アルバイトです。これから仕事」

「これから？確かに大変だ！」

「また、お会いしたいです。また、ご飯食べに来ます！」

その子は俊麗と又何か早口で話すと表に飛び出していきました。大きなトートバッグを抱えて。

僕ら二人が話し込んでいる間、俊麗は、柱の陰に隠れて黙っていました。それに気づいていたので、ちょっと可哀想な気がして

「なあ、俊麗、来る学生さん、みんな何か俊麗に相談してるな。そして俊麗、何かアドバイスみたいなことしてるな。二年前も今も。ホールの他の店員さんにはないことだ。俊麗は、結構たいしたヤツかもしれんな」

「あー、いや、分からない」

そういうので、それ以上は言いませんでした。

こういうことを言うと、俊麗も厨房の中の鄧さんも、今一人いる長さんも困ると思ったので、帰り際、持っていた菓子の袋を差し出して

「この前、女の俊麗にお菓子上げたら？それだと鄧さんや長さん怒っちゃうから、今日はお菓子上げるな。いいだろ？」

三人にとっては思いがけない話だったのか、みんなはおかしそうに笑いました。

ぼくはとても嬉しい気分でした。僕の話は、ごくごく一部のを除いて日本の人は聞いてくれないようなのですが、日本にいる外国、特にまだまだこれからの国や小さな国の人たちは何故か話を聞いてくれる。時々は聞きたがってくれたりもする。それが楽しくて、そういう場所を回っているようなところが自分にはあるのですが、今日はその「一番華の部分」を賞

ったような気がしたので、特に嬉しかったのかもしれません。

帰りはまた、1時間半ほどかけて歩いて帰りました（俊麗には1時間と言ってあります）

いつしかやんだ雨上がり、それまでの雨に濡れ夜桜が街路灯に映えて瑞々しく（みずみずしく）、月明かりも澄んで凜とした気持ちにもなる夜道でした。

「こういうヤツらがいる限り、まだまだやるぞぉ〜！」

さくら同様「これから感」満開の63歳の寒い春の夜でした。